

4 GAP認証農場における事例調査の要約

(1) 調査方法

管内の国際水準GAPの認証農場のうち、主に網走農業改良普及センターが認証取得を支援した農場を9農場抽出して、令和元年に聞き取りにより調査を実施した。

(2) 調査内容

統一した調査票を用いて、次の1)~8)について調査した。

1) 経営概要

- ・経営形態、経営面積、作付け品目数、作業員数、雇用有無

2) GAP認証の取得状況

- ・認証取得の目的、認証を取得したGAPの種類、認証品目

3) GAP認証取得までのスケジュール

- ・基準書の内容習得開始・初回審査・認証取得の時期

4) GAPの取組内容と経費

- ・GAPに取り組む上での資材の購入や施設の改善を行った内容と経費

5) GAP支援ソフトの利用有無

- ・クラウドやWEBアプリ等の利用有無

6) GAP導入による経営の変化

- ・①販売面、②収量・品質面、③コスト面、④作業員管理、⑤労働安全の改善の有無(各農場の経営者に意識の変化を聞き取り)

7) GAP導入により最も効果があった点

- ・自由回答

8) GAPに取り組む上での問題点

- ・GAPに取り組む上で大変な点や問題点について、①データ管理に手間がかかる、②消費者や取引先の理解が不十分、③各担当責任者の育成が難しい、④施設改善や審査・認証に経費がかかる、⑤環境整備や施設改善が難しい、⑥作業員や従業員の意識・責任感が改善されない、の6点から選択

(3) 調査結果の概要

結果の要約を以下に示す。また、農場別の調査結果は13~30ページに記載した。

1) 経営概要

- ・事例調査を実施した9農場については、畑作物・園芸作物を中心とした経営形態が多く、経営面積は概ね15~40ha、1事例のみ500haを超える大規模法人であった。
- ・作付品目数は5品目程度で、ほぼ半数の農場が雇用労働を利用していた。

2) GAP認証の取得状況

- ・認証取得の目的は農場によって様々であったが、「取引先・販売先からの要望」あるいは「農場管理の改善」と回答した農場が複数あった。
- ・調査した農場の大半がJGAP(個別認証)であった。
- ・認証取得時期は平成28年~令和元年の間で、平成30年が5農場と最も多かった。

- ・ 認証取得品目は、「たまねぎ」が最も多く、次いで青果物では「かぼちゃ」、「にんじん」、「ばれいしょ」、穀物では「小麦」で取得する農場が多かった。

GAP認証農場の経営概要とGAP取得状況

事例No.	市町村	経営形態	作付形態	経営面積	作付品目数	雇用労働	GAPの種類	個・団	認証取得時期	認証品目
1	北見市留辺蘂	法人	畑作+園芸	40ha	5	あり	GLOBALG. A.P. (青果物)	団体	H28年1月	たまねぎ
2	訓子府町	法人	畑作+園芸	12ha	9	あり	JGAP (青果物)	個別	R1年5月	ほうれんそう
3	美幌町	個人	畑作+園芸	30ha	4	無し	JGAP (青果物)	個別	H30年7月	にんじん
4	津別町	法人	園芸	14ha	4	あり	JGAP (青果物)	個別	H29年11月	たまねぎ、にんじん、かぼちゃ、アスパラ
5	津別町	個人	畑作+園芸+飼料作物	21ha	5	無し	JGAP (青果物・穀物)	個別	H31年1月	ばれいしょ、かぼちゃ、秋まき小麦、小豆
6	湧別町	個人	畑作+園芸+飼料作物	19ha	5	無し	JGAP (青果物)	個別	H30年2月	たまねぎ
7	湧別町	個人	畑作+園芸+飼料作物	31ha	4	無し	JGAP (青果物)	個別	H30年2月	たまねぎ
8	湧別町	個人	畑作+園芸	17ha	3	無し	JGAP (青果物)	個別	H30年2月	たまねぎ
9	佐呂間町	法人	畑作+園芸+飼料作物	550ha	11	あり	JGAP (青果物・穀物)	個別	H30年7月	ばれいしょ、てんさい、かぼちゃ、キャベツ、アスパラ、秋まき小麦、春まき小麦、二条大麦、大豆、そば

3) GAP認証取得までのスケジュール

- ・ GAPに関するセミナーへの参加や基準書の内容習得に始まり、自己点検、外部審査とその是正報告を経て認証取得に至るまで、最短で5か月、最長で2年、平均で1年程度を要していた。
- ・ 農繁期でも施設改善や帳票類の作成に取り組んだ農場では、認証までの準備期間が短くなると考えられた。

4) GAPの取組内容と費用

- ・ 全農場が「普通救命講習」（無料）を受講していた。また、「農薬保管庫」、「消火器」、「救急箱」を設置したり、「残留農薬分析」を実施する農場も多く見られた。
- ・ 「残留農薬分析」はこれまでも出荷先（JA等）の自主検査が行われていたが、JGAPではISO17025認定機関による残留農薬分析が求められることから、新たにホクレン農業総合研究所あるいはエア・ウォーター（株）に分析を依頼し実施していた。
- ・ 経営者や作業者がJGAP指導員の資格を取得する農場（法人経営）も見られた。
- ・ 外部審査の審査・認証費用

は概ね10万円程度（JG

GAPの取組内容と費用

APの場合)であった。

- ・ 農場施設の改善、検査・分析、資格取得等、GAPの取組にかかった主な費用の総額(審査費用を除く)は、1農場あたり約215,000円であった。

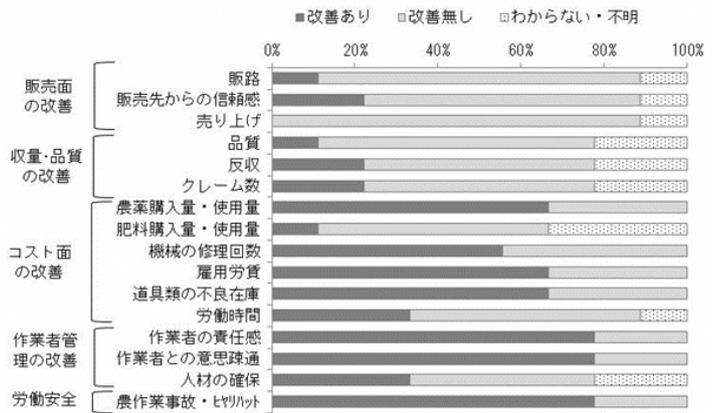
取組内容	費用	備考	取組農場数
普通救命講習受講	無料	消防署で受講	9
残留農薬分析	10,000~20,000円	ISO17025認定機関での分析	8
農薬専用の保管庫設置	190,000~300,000円	JRコンテナ、プレハブ、物置など	6
消火器の設置	17,000~50,000円		6
救急箱の設置	500~10,000円		5
農薬保管庫内の改修	100~10,000円	トレイ、鍵、換気口の設置など	4
水質分析	無料~13,200円	保健所で分析する場合は有料、ネットで公開されている分析結果を参照する場合は無料	4
選果施設の改修	1,500~62,000円	照明器具飛散防止、鳥獣侵入防止など	4
廃棄物の処理	0~150,000円		3
看板・掲示物の設置	2,000~5,000円	危険物の表示等	3
はかりの検定	2,600円	毎年または隔年で検定	3
作業免許・資格の取得	10,000~40,000円	フォークリフト免許、刈り払い機の資格	2
簡易トイレの設置	150,000~260,000円		2
ヘルメットの購入	3,000~6,000円		2
土壌分析の実施	0~2,500円	新たに実施したもの	1
防油堤の設置	10,000円		1
堆肥流出対策の実施	30,000円		1

5) G A P 支援ソフトの利用有無

- ・作業記録や帳票類の作成にあたり、サービスを利用している農場は無かった。
- ・これらのサービスの利用に費用がかかること、G A Pの最新版の基準書に対応しているサービスが少なかったことなどが要因と考えられる。

6) G A P 導入による経営の変化

- ・販売面、収量・品質については、「改善あり」と回答した農場は少なかった。認証品目として多いたまねぎは、農協に出荷し、共計で販売している農場が多く、価格や販路には影響が小さいと考えられた。
- ・一方で、コスト面の改善、作業管理の改善については、「改善あり」と回答した農場が多かった。コスト面の改善では、「農薬・肥料の在庫管理により必要な分だけ買うようになった」、「機械の定期点検・整備により修理が少なくなった」、作業者の管理では、「責任者を明確にすることで責任感が向上した」といった意見が聞かれた。
- ・労働安全では「改善あり」と回答する農場が多く、「家族や従業員の間で危険な作業について話し合うなど労働安全に対する意識が向上した」といった意見が聞かれた。



G A P 導入による経営の変化

G A P 導入により最も効果があった点

7) G A P 導入により最も効果があった点

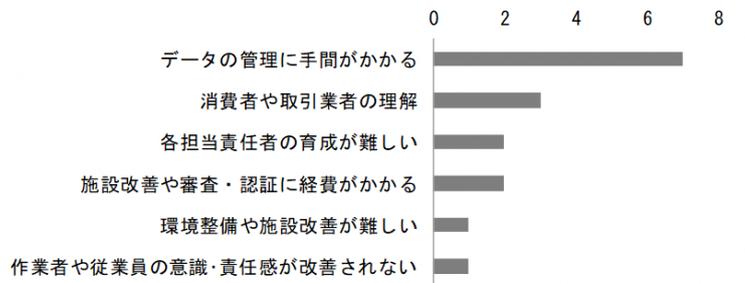
- ・「整理整頓」と回答した農場が最も多く、道具を探す手間が省け、効率的な作業が実現したり、作業動線の確保による交差汚染のリスク低減等につながっている。また、農場内の危険な場所や作業を洗い出すことによる「農作業安全の意識向上」、農薬・肥料の在庫台帳を作成することによる「不良在庫の解消」も複数の農場で効果を感じていた。

事例No.	最も効果があった点
1	整理整頓、人材確保
2	経営改善のきっかけ
3	整理整頓
4	農作業安全への意識向上
5	整理整頓
6	整理整頓、不良在庫の解消、クレームの減少、販売先からの信頼性向上
7	計画的な作業の立案、家族内のコミュニケーション、衛生管理の意識向上
8	不良在庫の解消、農作業安全への意識向上、文書化による情報管理
9	衛生管理・農作業安全の意識向上 作業者の健康配慮

(回答数)

8) G A P に取り組む上での問題点

- ・「データの管理に手間がかかる」が最も多かった。また、「施設改善や審査・認証に経費がかかる」、「消費者や取引業者の理解が不十分」という意見も複数の農場で聞かれた。



G A P に取り組む上での問題点

5 G A Pに取り組んだ農場の経済性

(1) 調査方法

事例調査を実施した9農場のうち、平成29年にJ G A P認証を取得した1農場について、G A P認証取得前(平成28年)と取得後(平成30年)の経済的な変化を調査した。なお、調査農場については、以前から有機J A S認証を取得している。

(2) 調査結果

1) 収量・販売面の変化

認証品目別収量は、アスパラガスを除いて平成28年を下回った。また、品目ごとの平均単価はいずれの品目も低下した。収入金額は、たまねぎ、アスパラガスでは平成28年を上回ったが、にんじんは下回った。

要因として平成30年は、6月中旬～7月中旬の低温、寡照、多雨、8月中～下旬の降雨により露地野菜の生育・収量に影響を及ぼし、細菌性病害及び生理障害による規格外品が多く発生した。

販売面では、有機栽培のたまねぎを高く購入してくれる取引先があり、収入金額としては平成28年を上回ったが、G A P認証取得による販売面への影響は小さかった。

G A P認証品目の収量・販売額(H30年)
(H28年を100とした指数)

項目	たまねぎ	にんじん	アスパラガス
収量	73	89	109
販売単価	74	56	98
収入金額	108	50	109

(参考) 津別町を管轄する普及センター美幌支所の作況調査におけるたまねぎの反収も「88」と低下した。
※作付品目のうち、「かぼちゃ」は湿害により極端な低収となったため、調査から除外した。

2) 費用面・労働時間の変化

費用面では農薬費、動力光熱費が増加し、労働時間が増加した。これは、天候不良に伴い、病害防除の回数や管理作業が増加したためと考えられる。

一方で、肥料費、農具費、修理費は減少した。整理整頓や在庫管理により、必要なものだけ購入するようになり、機械類も整備点検を着実に行うことで大きな故障に至らなかったためと考えられる。排水対策の土地改良に費用を要したこともあり、経営費全体としては増加する結果となったが、費用面では、認証取得直後でも低減効果が見られた。

調査農場の費用・労働時間の変化
(H30年についてH28年を100とした指数)

科目	H30年実績
経営費	105
農薬費	107
肥料費	49
動力光熱費	124
農具費	57
修理費	17
労働時間	140

3) 農産物の信用力への影響

調査農場では、G A P認証取得後にたまねぎの販路が1件増加した(G A P認証農畜産物を食材として専門に扱う東京のレストラン)。また、アスパラガスを購入した消費者からは、「安全・安心の農場であるとの認識が高まった」との声が寄せられている。

認証取得直後では販売面への影響は小さいが、G A Pに基づく「適切な農場管理」を継続的に実践していくことで、信用力の強化、取引の持続につながることを期待される。